
静かな休日

otoutoane

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静かな休日

【Nコード】

N8208D

【作者名】

otoutoane

【あらすじ】

静かな休日。僕の部屋に突然巨大なクマが現れた。僕の部屋で起きたと思われる僕とクマとの一瞬の出来事の物語。

ある日の日曜日、僕は久し振りに家でゆつくり本を読んでいた。こんなに静かで落ち着いた休日は久し振りだった。

ふと気付くと部屋の中にかクマがいた。熊。哺乳類。そのクマはとても汚く、そしてとても巨大だった。クマの存在を僕が感じた瞬間、この部屋の落ち着いた空気、空間が消滅した。

クマは僕のことをじっと見つめていた。クマも僕の存在を理解しようと思死なように感じた。きっとこのクマも何故自分がこんなところにいるのか理解できなかったんだと思う。そして僕はもちろん急に僕の部屋にクマが現れたことに驚いた。そして現実の事として受け入れられなかった。当り前のことだと思う。どこの誰が自分の部屋に急に薄汚れて巨大なクマが足音もたてずに現われて、その現実を素直に受け止められるだろう？

クマは必至に僕の、そして自分の今ある立場について理解しようと努めているように感じた。クマも僕も驚いていたのだ。まるで二人の別々の泥棒が偶然同時にある家に侵入し、偶然遭遇してしまったような、そんな間の悪さまでこの部屋には存在した。

僕はそのクマの姿を見て何故だか親近感を感じた。同じだな、そんなことまで思って思わず微笑まで浮かべてしまった。そして僕の心が通じたのか、クマも少し笑ったように思った。とりあえずクマも落ち着きを取り戻したようだ。

おかしな話だった。その瞬間この部屋には前と同じ落ち着いた空気が流れた。ただ、その落ち着いた空間に存在する生き物が二匹に増えただけだった。もしクマが人間だったら、僕はコーヒーかなんかを出して「とりあえず落ち着いて話しましょうか」なんて言っていたかもしれない。

するとクマの存在が目に見えて薄くなってきた。すーっと少しずつ、まるで何か強い光が力を失い少しずつ消えていくように、クマの後ろにあつた僕の部屋の洋服箆笥などがクマの胴体から透けて見えてきた。クマはまた少し笑ったように思った。僕はクマが笑っている映像など見たことがない。もちろん笑っている顔を実物で見たこともない。しかし僕にはクマが笑っているように感じた。しかも苦笑いだ。「せつかくの休日に急にお邪魔しちゃって悪いわね」と言っていた。僕にはそう聞こえたような気がした。

「気にすることはないよ。ちょっと驚いたけど、それだけだ。」僕は言った。するとその言葉は完全な独り言になった。この部屋はまた僕一人になっていた。いや、僕一人に戻っていた。クマがいた、存在していたと思われる場所には何も、匂いや汚れ、もちろん影も形も残っていないかった。

どのくらいクマがこの部屋に存在したか僕にはわからなかった。いや、本当に存在していたのかも僕にはわからなかった。今のは夢だったのだろうか。

夢だしたら僕はいつ目覚めたのだろうか、まだ目覚めていないのだろうか。しかしクマがこの部屋に本当に存在したとしても、それは一瞬のことだった。そして僕はもうクマがこの部屋に存在していたときの事をあまり思い出せなくなっていた。

僕はクマと一緒に過ごした一瞬のことをすぐ忘れるだろうな、と何となく思った。僕の部屋にクマが現われたのに僕はもうすでに忘れかけているのだ。あと一時間もたてば綺麗に忘れてしまうだろう。僕は急にもつたれないと思った。僕がこの事実だと思われることを忘れてしまった瞬間、多分それは無かったことになるのだ。ただでさえあり得ない事なのに、僕が忘れてしまった瞬間それは完全に無かったことになってしまふ。その事実だと思える出来事は完全に消滅してしまうのだ。無。

僕は何かに書き残しておこうと思った。しかしそんなことをしても無駄だと思った。僕の頭の中に残ったさっきの出来事は一秒ごと的大幅に削除され続けているのだ。もう何がいたのかさえはつきりと思い出せなくなってしまうた。

僕は仕方なくコーヒーをいれた。二杯。

きっとこのコーヒーを飲み終わる頃には自分が何故二杯もコーヒーを作ったのか混乱するだろう。

それでもいい。何とか今あった出来事を少しでも長くこの部屋の中に残しておきたい。印でもなんでも。

僕は本の続きを読み始めた。静かで落ち着いた休日だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8208d/>

静かな休日

2010年11月14日09時45分発行